



# ふくりゅう

特定非営利活動法人  
日本下水道文化研究会会報

発行責任者 酒井彰(運営委員会代表)

平成22年4月9日  
通巻64号

## 第14回 日本下水道文化研究会 総会のお知らせ

日本下水道文化研究会では平成22年度総会(第14回)を下記のとおり開催いたします。

平成21年度は、隔年で開催している研究発表会(第10回)を開催するとともに、分科会活動、支部活動がそれぞれ活発に行われました。

海外技術協力分科会では、JICA(国際協力機構)草の根無償協力事業、TOTO水環境基金によるプロジェクトを9月に終了するとともに、新たに三井物産環境基金の助成によるプロジェクト(平成20年10月開始)で、トイレ導入に併せて飲料としている井戸水が砒素に汚染されている農村地区において、ため池を水源とする飲料水供給施設を導入しました。

尿尿・下水分科会では、定期的な例会の開催を継続し、例会での講話内容を関係雑誌へ寄稿するなど、活動内容の普及を進めました。また、6回にわたって行われた小平市ふれあい下水道館における特別講話会へ講師を派遣しました。関西支部では、水に関連するNGOとのネットワークをベースとしたイベント活動がさらに拡大・展開しています。

また、W・K・バルトン没後110年にあたる昨年、日本とスコットランドで記念事業が行われました。この事業は、

本会で管理しているバルトン記念基金に有志からの寄付金、助成金を加えて実現したものです。

相変わらず、資金的な余裕は十分とはいえないなかで、支出を抑えながらも、必要な活動の継続、ならびに上記のような活動展開ができましたのも、会員各位のご協力があったことと存じます。深く感謝申し上げる次第です。

6月上旬には総会議案書をお送りする予定です。総会は、分科会、支部を含めて一年間の活動成果を会員の皆様へお伝えする場として考えております。本会諸活動についてご理解を深めていただくとともに、忌憚のないご意見を交換できる場にしたいと思っておりますので、ふるってご参加お願い申し上げます。やむを得ず参加いただけない会員の皆様は、委任状を提出願います。

記

日時 平成22年6月26日(土) 13:30～15:30

場所 日本水道会館7階会議室

千代田区九段南4-8-9

プログラム(予定)

第1部 分科会・支部活動

第2部 総会

※総会終了後懇親会を開催します。

### 第46回定例研究会 報告

## 『地域資源循環型の社会形成に向けて』

(株)日水コン 海外事業本部 田中郁夫

処分するのにやっかいで環境に負荷をかけてきた生ごみ、下水汚泥、家畜のふん尿、農業残さ、魚加工・食品加工残さ等の有機物なら何でも、『水熱反応』によって分解し、有用なエタノール、固形燃料、液体燃料、家畜の飼料、土壌改良材等に大変身させよう、それによって資源循環型社会形成を実現しようというのが、(財)有機質資源再生センター・資源循環システム研究所長・加藤善盛氏のお話であった。

3月1日の夕刻から新宿駅西口、TOTOのプレゼンテーションルームで開催された講演会の出席者は10名足らずであったが、加藤氏が長年たずさわって来られた実務的研究成果が熱く語られ、聴衆の心をとらえた。質疑応答の時間には一層の熱を帯び、この技術の適応性、実績、課題等について多くの応答があった。

この講演の中で一つのキーとなるものが『水熱反応』である。水熱反応とは、水蒸気で有機物を分解するものであるが、「密閉容器の中で水の温度を上げると100℃以上で蒸気となり、さらに高温にすると蒸気圧が生じる。この条件下で、水分子の反応性が高くなり、有機物は水

に溶けやすく、かつ分子の鎖が切れ、いわゆる『加水分解反応』が起き、10分～1時間で低分子化する」という技術である。この技術は処分に困る有機物を効率的に有用物に代えるばかりではなく、重金属類の危険性を大幅に削減するものである。

また、この講演では、この技術の研究例の他、実施例としてバイオマス天然ガス化の事例、針葉樹の廃木材を主原料とした「有機質高温殺菌堆肥」の事例、発酵堆肥施肥による糖度が高く日持ちがよい野菜・果物生産例の紹介があった。

講演の最後は霞ヶ浦流域を例にとり、流域の資源・エネルギー循



講演中の加藤善盛氏

環効果を試算し、水熱反応プロセス適用効果の優位性を述べるものであった。

資源の乏しい我が国では、資源循環型社会の形成という点に関しては国民の意識は高く、その技術は世界に先

駆けているものと思われる。現行の施策においても対策は多く講じられてきているが、加藤氏の提案する施策は資源循環型社会をより一層押し進めるものと考えられる。加藤氏の一層の活躍を期待するものである。

## 平成21年度屎尿・下水研究会 特別企画 報告

### 「小平市ふれあい下水道館・特別講話会への講師派遣」

屎尿・下水研究会の平成21年度特別企画として、小平市ふれあい下水道館・講座室（定員24名）で実施された特別講話会へ講師を派遣しました。この講話会は、昨年10月から3月までの間、月に1回・合計6回、ともに日曜日の午後（1時30分～3時30分）に開催されました。各回の講師とテーマは、以下のとおりです。（敬称略）

回	開催日	講師	テーマ
1	10月4日	稲村光郎	日本のリサイクルの歴史
2	11月8日	関野 勉	トイレットペーパーの歴史
3	12月6日	酒井 彰	開発途上国の水と衛生の現状と改善
4	1月17日	高村 哲	バングラデシュ農村でのトイレ作り
5	2月7日	中村隆一	水琴窟を訪ねて
6	3月7日	平田純一	トイレからしゃがみ文化と腰掛け文化を探る

以下に、各回の講話のほんのさわりを紹介します。

#### 第1回（日本のリサイクルの歴史）

江戸時代には、古着屋、樽買い屋などによるリユースや竈灰、糠、生ごみの肥料への、また貝灰の塗り壁材料への、あるいは竈灰の酒造りへのリサイクルが盛んに行われていましたが、それを支えていたのは庶民の生活をかけた回収活動でした。リサイクル社会であったといわれる江戸時代でもけっこうゴミは出ていました。最近では各種のリサイクル関連の法律が制定され、資源回収に対する行政の関与が深まってきています。

#### 第2回（トイレットペーパーの歴史）

現在では世界の半分近くが、尻を拭くのに紙を使っています。日本では12～13世紀（平安後期～鎌倉中期）には紙が尻始末用に使われ始めましたが、それ以前は葉っぱや木製のくそべら（ちゅう木）が用いられていました。トイレットロールの国産化は大正13年からですが、明治32年の新聞広告にはすでに「トイレットペーパー」なる言葉がみられます。演者の収集したチリ紙やトイレットロールの展示・説明も併せて行われました。

#### 第3回（開発途上国の水と衛生の現状と改善）

人が安全に生活していくうえで、飲み水の確保と衛生的なトイレの設置は欠かせない要件ですが、途上国においては貧困問題とも絡んでその実現は極めて不十分です。このことが健康上のリスクを高めています。衛生・

健康リスク・貧困の連鎖を断ち切るための衛生改善策として、日本で経験した屎尿の農地還元という知恵に基づいた「エコサン・トイレ」の啓発と導入・農地還元の実践を現地で行っています。

#### 第4回（バングラデシュ農村でのトイレ作り）

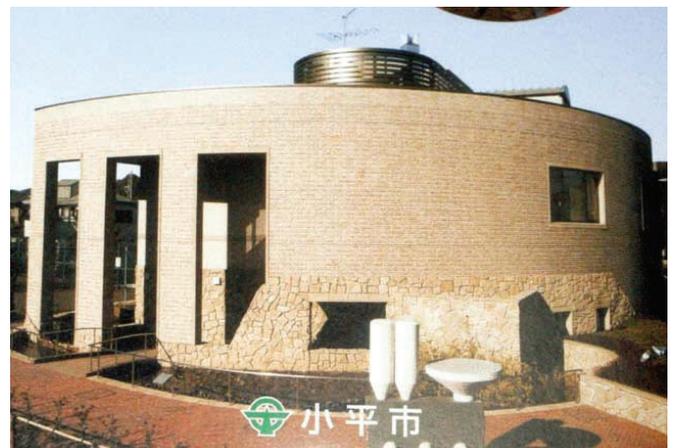
バングラデシュの農村で行っている、屎尿分離型のトイレ作りを啓蒙・普及させていく過程を、ビデオや写真やイラストを使って分かり易く実況的に説明いただきました。「捨てる文化から、循環する文化への転換を目指す」あるいは「日本人がいなくなっても、間違いないトイレの作り方や使い方ができるような仕組みにしておきたい」は、印象的なフレーズでした。

#### 第5回（水琴窟を訪ねて）

江戸初期の小堀遠州が始まるとされる水琴窟の妙なる水の滴り音に魅せられ演者が、その凜とした気品（音色と形状）を求めて、全国を訪ね歩いたルポルタージュです。水琴窟はもともと手水鉢からの排水を処置する施設から派生したものだそうです。この「ふれあい下水道館」にも水琴窟の一種である壺中琴が置かれており、かすかではあるが自然な音を奏で、来館者にいつかのやすらぎを与えています。

#### 第6回（トイレからしゃがみ文化と腰掛け文化を探る）

ブルーノ・タウトの「しゃがむ姿勢はヨーロッパ人にこそきついが、日本人には何のことはない休息の姿勢なのである。この人達にとっては、しゃがんでいることは、我々が椅子に腰掛けているのといっこうに変わりがないらしい。」という言葉に触発されて、日本と西欧のトイレ形式の違いについて、文化人類学的に解き明かそうと、世界のトイレを見聞して廻った情報を駆使しての講話でした。（運営委員・地田修一 記）



小平市 ふれあい下水道館

## 第60回尿尿・下水研究会例会報告

## —日本の水質の基礎を築いた柴田三郎氏の業績—

3月25日(木)、東京の「TOTO東京センター・ショールーム」のプレゼンテーションルーム(会議室)で、標記の例会を行いました。講師は柴田三郎研究会のメンバーである齋藤健次郎氏(元日水コン)、菊池隆子氏(月刊下水道・編集部)、石井明男氏(当会運営委員)の3氏です。3氏は数年前から上記の研究会を立ち上げ、東京・三河島污水処分場の場長を務め、戦前から戦後にかけて下水・廃水の分析方法や処理法を研究し、その礎を築いた柴田三郎氏の業績を掘り起こしてきましたが、今回は、その成果の一端をご披露していただきました。

以下に、講話のほんのあらましを紹介します。

- ① 明治32年、日立市に生まれる。東京帝国大学工学部で無機化学を専攻。大正14年、東京市下水課嘱託となり衛生試験所に配属。
- ② 昭和6～8年、内務省と警視庁との協力による「下水懇話会」において、全国数百の工場廃水を採取、自宅に小さな実験室を設け、分析に明け暮れた。英米独から自ら購入した書籍を参考にした。
- ③ 昭和8年、水道協会の「下水試験法協定に関する委員会」の委員となり、10年、下水試験法の原案を作成。その成果を、水道協会誌に15～16年にかけて11回連載。後に、「下水試験法註解」としてまとめる。溶存酸素の分析法に「柴田・ミラー変法」の名が残る。
- ④ 昭和15年頃、「下水浄化における活性汚泥の化学的研究」で学位を取得。
- ⑤ 昭和17年、三河島污水処分場長に就任。19年東京都を

退職。

- ⑥ 戦後、経済安定本部資源調査会委員に選ばれる。衛生部会第二小委員会(尿尿の資源化等)委員長。
- ⑦ 経済安定本部を退いてからは、コンサルタントとして民間企業の工場廃水の指導等に当たる。
- ⑧ 語録-1「現代に於いては下水処理は人類の保健衛生上欠くことの出来ない施設である。然るに一般人は今なお自分達に最も親しく日常自己が製出している所の下水の処理に関する認識が少なく、… 或いは少なくとも下水管で河川に放出すれば漁族の餌としては好適であろう位に考えていることをしばしば見受ける」
- ⑨ 語録-2「下水道に関する指導者を首としポンプ場の一工手に至る迄水質試験の意義を理解して自己の担当職務に従事すれば如何に多くの困惑が解決され、経済的にも寄与する所多いかは明言する迄もない」
- ⑩ 語録-3「研究者として真実を知ればよく、それを指導する人に告げれば一分析者の自分の責任は終り、それをどうかするのは政治に関わる人とか直接監督する官公庁の人のことだ、と私はいつも思っています」
- ⑪ 語録-4「し尿の嫌気性消化について、世界で最初に私が化学的に研究した」
- ⑫ 工場廃水の研究を始めたきっかけは、「三河島下水処分場は当時東京市の40万人の下水処理をしていた。それを、一工場の廃水によって壊されては市民に申し訳ない」という考えによる。
- ⑬ 昭和59年没。

(運営委員・地田修一 記)

## 旧事九官録 巻13

## 針聞書の事

本会運営委員 森田英樹

2005年、大宰府天満宮に隣接して九州国立博物館が開館した。博物館では、いの一にミュージアムショップに行くことにしている。私はミュージアムショップが好きだ。ショップに行けば、その博物館の目玉が一目でわかる。そして、各種レプリカの存在の有無がわかる。博物館に先を越され、すでに本物を手に入れられない私としては、レプリカで心を癒すしかない。図録が充実していれば、さらに安心である。さて、九州国立博物館はどんなところか、早速インターネットでミュージアムショップの頁を覗いてみた。そこには、「針聞書」という文字が目立つ。絵葉書・ピンバッジ・ねつけ・ぬいぐるみ・キーホルダー・シール・Tシャツ・各種フィギア、どれもこれも得体の知れない虫たちがモチーフになっている。「針聞書」関連の図書も何冊か出版されている。この奇妙奇天烈な虫たちはいったい何者なのか。そもそも「針聞書」とはなんだろう。どうやらこれは、すなおい「はりききがき」と読めば良いようである。東洋医学の針に関しての医学書のような。販売されている虫たちは、「針聞書」の中に登場する、病気を引き起こ

すと考えられた想像上の生き物らしい。なかなか、面白そうだ。機会があればいつか訪れて、見てみよう。

所用があつて九州に行った。博物館に1時間くらいなら時間を割けそうである。「針聞書」を見るだけなら十分だ。さっそくミュージアムショップに直行した。確かにインターネットで見た各種の奇妙奇天烈な虫たちが沢山販売されている。店員に「針聞書」の展示場所を聞き、見に行った。残念ながら、展示されているのは、再現文化財(複製品)である。しかも全152ページの内、僅か4ページのみの展示で全く無念であった。

「針聞書」とは、永禄11年(1568)に摂津の国の茨木元行が著した鍼術の秘伝書である。1568年と言えば、戦国、信長の時代である。所は、現在の大阪府茨木市付近になるであろう。「聞書」というからには、その成立は当然、1568年以前ということになる。全体は4部で構成されている。第1部は、針の基本的な打ち方。病氣別の針の打ち方など320箇所を記した聞き書き。第2部は、灸や針を体のどこに打つかを示した図。第3部が、今回のお話の中心である、体の中において病気を引き起こすと考

られた想像上の虫の図63点。虫の絵が書かれ、その特徴・治療法が記されている。そして第4部の臓器や体内の解剖図で構成されている。

トイレの事をやっているとき、寄生虫問題が良く話しに出る。幸か不幸か私は寄生虫のお世話になった事は無い。思い返せば、小学生の時であったろうか、何でも「ピンテープ」と言うらしいが、セロテープみたいなものをお尻に貼って学校に提出した記憶がある。当時は、ピンテープの使い方説明図解になぜ、キューピーが使われているのか考える方が関心事であった。今となつては、私も立場上、回虫の1匹や2匹ハラの中で飼っている方が何かと都合が良いのかな、とも思うが、博物館や写真集で見る寄生虫の標本にはゾットする。あんなものが自らの体内から抜け出て来て、御対面するのは、やはり勘弁願いたいものである。しかし、「針聞書」に登場する、63種の虫たちは、見方によっては実にユーモラスにも見える。彼らは400年以上の時を隔てて、2005年の九州国立博物館の開館の時にミュージアムショップのオリジナルグッズに抜擢された。以後、キモカワイイとの評判で急速に繁殖を続けている。では、彼らの生態のいくつかを紹介してみよう。

**気積 [きしやく]** (図-1)

色は赤黒い。油気を好んで食べる。食べ物に油気が多くて精の付く魚や鳥のおかずが無いと、ご飯だけではさっぱり食べない。精力絶倫で色欲生活に溺れるのは、必ずこの虫が起こした病である。虎の腸を食べるとこの病は消滅する。[注] 虎の腸は入手不能であったので、好色は死んでも治らないという教訓を導いている。



図-1 気積

**悪虫 [あくちゆう]** (図-2)

鋭利な6本の爪で宿主に接近し、尖った口でご飯を食らう。脾臓にいる。木香 [キク科モッコウの根] を内服すれば、みな消滅する。



図-2 悪虫

**肺虫 [はいむし]** (図-3)

この虫はご飯を食べる虫である。白朮 [びやく] キク科オケラの根茎] を煎じて内服すると、この虫は消滅する。肺の臓にいるこの虫が、腹中 [体内] から浮き出して、どこか他所に飛んで行ってしまうと、宿主は死んでしまう。人魂に変身する虫である。

**脾臓の笠虫 [ひぞうのかさむし]** (図-4)

この虫は脾臓にいて、赤い笠が邪魔して、宿主は食べ物を

受け付けなくなり、宿主の血色は失せる。痩せたり肥えたりする体重の激変を繰り返す人はこの虫の仕業である。笠を頭に被り胴体には赤い毛が生えている。阿魏 [あぎ] セリ科アギのゴム樹脂 莪朮 [がじゆつ ショウガ科ウコン属の茎根] を服用すれば平癒する。

**脾臓の虫 [ひぞうのむし]**

(図-5) この虫は脾臓にいて人を悩ませる。長く伸ばした両手の爪で肝臓を搔き付けば傷暑 [熱中症] になる。この虫が筋肉を掴めば、頭を打ったように目眩がして体が火照る。木香 [キク科モッコウの根] と大黄 [タデ科ダイオウの茎根] を服用するとこの虫は消滅する。[注] 熱で真っ赤になり、両手を広げて千鳥足でフラフラしている。病の状態を虫の形態で表現している]

果たして、「針聞書」に登場する彼らの中には回虫や蟻虫のような実在の寄生虫は含まれているのだろうか。どうやら、私の目では見いだせない。もしかすると、「針聞書」が書かれた16世紀には、回虫や蟻虫のような寄生虫の存在は知られていなかったのかも知れない。とりあえず、平安時代の百科事典といわれる和名類聚抄で調べてみた。「虬虫」という項目で、俗にいう「カイ」または「アクタ」としている。解説には、「人の腹の中の長き虫なり」とある。10世紀の和名類聚抄に登場しているのであれば、16世紀の茨木元行は寄生虫の知識を持っていたと解する方が自然であろう。してみるとやはり、63種の虫たちは全て想像上の生き物と思える。いやいや、科学的に説明できない世界を認めようとせず「想像上」と断ずるのは、現代人の驕りであり、あまりにも傲慢だ。400年以上、密かに生き続け、21世紀に増殖を開始した彼らから何か学ぶ所があるはずだ。「針聞書」古の先達の英知を侮る事はできない。



図-3 肺虫



図-4 脾臓の笠虫



図-5 脾臓の虫

科学的に説明できない世界を認めようとせず「想像上」と断ずるのは、現代人の驕りであり、あまりにも傲慢だ。400年以上、密かに生き続け、21世紀に増殖を開始した彼らから何か学ぶ所があるはずだ。「針聞書」古の先達の英知を侮る事はできない。

バングラデシュ便り12号 (April/2010)

## パラサイト

本会運営委員 高橋 邦夫

約一ヶ月を超える滞在を終え、空港で帰国便を待っていた。明日は日本という湧き上がる思いは、現地の滞在時間に比例するのは実感である。ダッカ空港での手荷物検査は、搭乗口で行われる。それまでの訪問が20回は超えるかという中で、手荷物検査時の初めての体験を述べよう。

よくあることであるが、バック・バックにブザーが鳴った。特に疚しいものは無いので、係員が指示するとおりに中身の吟味に従った。強いてそれまでとの違いは、綿密なチェックを受けているという実感であった。それは今まで受けたことの無い財布の中身にまで及んだ。その中身は、若干の日本円、米ドル、そしてこの国の通貨である500BDT (バングラデシュ・タカ) 札が20枚程度であった。ここでクレームがついたのである。ちなみに1BDTは当時1.5円程度であった。

目ざとく500BDT札が20枚程度であることを見出した係員は、現地BDTの持ち出しは500BDTが限度であり、それ以外は例えば米ドルに変えるなどして出国するべしとお達しである。そんなことはかつて一度として聞いたことは無く、誰がいつ決めたのかと聞くと、税関の役人を呼ぶから、彼の指示に従えとのことである。フライト予定時刻までには小1時間あり、むしろ外国では何の役にも立たないBDTを米ドルに替える幸運とさえ思った次第である。

やがて、係員の説明を受けた税関の役人に付き添われ、出国ゲートを素通りし、ゲート前に立ち並ぶ両替の銀行窓口に行った。そして、いくつもの窓口では結局両替は出来なかった。理由は手持ちのBDTは市内のホテルで換金したものであり、そのホテルでなければ換金出来ないとのことであった。ここで、不可解なことが発生したのである。

一人の貧相な男が片言の日本語で、ドルに換金してやろうという。昔、新宿にいたことがあることなども口にした。その男は、120ドルを提示し、500BDT札20枚と替えてやろうというのである。金の換算には十分に慣れている。明らかに不当なレートでの交換になるので断った。多分「お前、アホか」とも口走ったと思う。次第に搭乗時刻も迫ってくる。念のため、税関の役人に、BDTの持ち出しは500BDTという規制があるのかどうか確認したが要領を得ない。しびれを切らして「飛行機に乗る」というと、役人は「次はいつ来るのか」という。

「来月や」というと、出国ゲートをパスし、搭乗口まで付き添ってくれた。無論、搭乗口はフリーパスである。結局、時間の浪費と不愉快な思いが残った。手荷物検査の係員と税関の役人、そして貧相な片言交じりの日本語を発した男はグルなのか。その前に、BDTの持ち出しが500BDTかどうかを確認しようと思った。

パラサイトには実に巧妙な手口で宿主に巢食うものがあるという。ある羊の腸に寄生するパラサイトは、大量の卵を糞出する。糞は陸生の巻貝に食され、体内で幼虫

となり更に糞出する。巻貝の糞は特有の膜で覆われ、それはある種の蟻の大好物である。蟻の体内に取り込まれた幼虫は、体内の隅々に寄生し活動を始める。その内、蟻の脳に侵入したパラサイトは、蟻に奇行を促す。その奇行とは、牧草の葉先に蟻を導くというのである。牧草は羊の大好物であり、パラサイトは改めて羊の体内に取り込まれ、交尾して大量の卵を産むという複雑かつ絶妙な経路をたどるといふ。

仮に、500BDT以上の通貨を持ち出す旅客を羊とした場合、手荷物検査の係員、税関の役人、不可解な換金男、両替商は、それぞれ、巻貝、蟻、蟻の脳に侵入したパラサイト、蟻の脳以外の体内に侵入したパラサイトと言えなくも無い。

この国へは貧困や災害救援を理由に、外国からの多くのドナーが寄せられている。ドナーに群がるパラサイトの最たる国家、およびその後ろ盾たる軍首脳、スウィフトのいうパラサイトのパラサイト、そのまたパラサイトのパラサイト、の連鎖を誰か解き明かさなにか。

このような憤りを一気に書き下していく中で、日本における性懲りも無く繰り返される政治献金疑惑が頭に浮かんだ。法律は多くの人々の持ち合わせているであろう道義的良心に根ざすものと思う。にもかかわらず検察・特捜すら立ち入れないパラサイトが道義的良心の彼方に居り、法律の立入れないバリアーがあり、パラサイトは平然とかつ傲岸に居続けているのである。

この国では、農村といえども、小さなバザールなど人々の集まる場所には多くの物乞いがいる。とりわけ、小さな幼児を抱えた婦人や、ハンディキャップを顕わにした物乞いが多い。彼らは単純明快なパラサイトである。しかしながら、上述した精緻で高度な法治国家といわれる先進国で繰返される現実とどちらが道義的良心に適ったものか。

その後500BDTの持ち出しの件について、現地友人が確認したところ、そのとおりであった。



パラサイトが共生か  
(ヒンドゥーにとって神聖なベンガル菩提樹バニヤン)

## 海外技術協力分科会より

バングラデシュ農村域でのエコサン・トイレ導入活動も6年が経過しました。新たな動きを含めて近況をお伝えします。

昨年10月にJICA草の根技術協力、TOTO水環境基金助成プロジェクトが終了し、現在進行中のプロジェクトは規模としては小さいのですが、三井物産環境基金助成による安全な飲み水供給と衛生を統合したプロジェクトとTOTO水環境基金助成によるエコサン・トイレを生かした教育教材の開発です。

前者の活動のなかで、このほどため池の水を水源として砂ろ過により飲料水を供給する施設の工事が完了しました。試験通水を経て、水質検査後正式に供給することになります。写真は、試験通水中で、蛇口もまだ付いていませんが、ろ過水をコルシ(水瓶)に

注ぐ女性です。きれいな水が確保できる期待の高まりから、笑顔が広がっています。村の生活空間の密度は非常に高く、尿尿は表流水の汚染源になりやすく、地下水が砒素に汚染されている地域において、安全な飲料水源が得にくい状況がありましたが、エコサン・トイレにより水源の保全も図っています。これからは、池の水質を維持することと、この施設を長く使っているよう、コミュニティで管理



ため池の水のろ過水を汲む女性

していく手立てを講じていきたいと考えています。

このバンシバリア村では、これまで28基のエコサン・トイレを建設してきましたが、約60基のトイレを導入するために、オーストラリア大使館の助成金をえることができました。本会のバングラデシュ事務所でも申請し採択されたものです。現地事務所が将来的に自立するという事は、バングラデシュでの活動においてひとつの目標ですが、その実現に向けての一步と言えるでしょう。

活動を始めた当初は、ムスリムの国で人の尿尿を農地に還元することなどできないと言われたものですが、活動地域ばかりでなく、尿尿を資源として活かそうという動きは広がりつつあるようです。そのひとつとして、農村に有機肥料を提供している方が、今のコンポストに不足しているリンを尿を添加して補いたいという申し出があり、学校トイレを共同で設置し、そこから回収した尿でコンポスト肥料の品質向上を図る事業を共同で始めることに合意しました。本会にとっては初めての収益事業になるかもしれません。

すでに採択が内定しているJICA草の根技術協力(パートナーシップ型)も近々スタートします。おかげさまで、新たな活動展開が可能になってきました。これからもアイデア提供、その他積極的なご支援をよろしくお願いいたします。

## 運営委員会・事務局より

- 機関誌をお届けします：今回も発行が年度末となってしまいましたが、平成20年度に行われた定例研究会の講演録などを収めた機関誌「下水文化研究21」をお届けします。ご感想などぜひお寄せください。
- 会費納入のお願い：新年度の会費納入をよろしくお願いいたします。会費納入は同封されている振込用紙をご利用ください。申し上げるまでもなく、本会のNPO活動は、会員各位の会費によって支えられておりますので、何とぞよろしくお願いいたします。
- 多摩川源流まつり：5月4日は、多摩川上流の小菅村で、24回目を迎える源流祭が行われます。夕刻からは、勇壮なお松焼き、打上げ花火もあります。本会では、今年も源流地域との交流を目的に参加したいと思っております。宿泊、アクセス、費用(本会より補助あり)などのお問い合わせならびに申込みは、藤森正法さんまでお願いします。(携帯 090-4132-5501、携帯メール fujimoriseihou@docomo.ne.jp) 申込みは4月25日ごろまでとさせていただきます。
- 2009バルトン記念事業報告書：昨年行われましたWKバルトン記念日英交流事業につきましては、本会報そのほかでも報告されておりますが、このほど同事業の報告書ができあがりました。残部がありますので、ご希望の方には1部1000円でお届けいたします。お申し込みは、メール、FAX等で本会事務局まで。

## ふくりゅう 通巻64号 目次

日本下水文化研究会総会のお知らせ	1
第46回定例研究会報告「地域資源循環型の社会形成に向けて」	1
尿尿・下水研究会 特別企画報告「小平市ふれあい下水道館・特別講話会への講師派遣」	2
第60回尿尿・下水研究会例会報告「柴田三郎氏の業績」	3
旧事九官録 巻13 「針聞書の事」	3
バングラデシュ便り12号 「バラサイト」	5

編集後記 インドネシア・スラバヤで行われたIWA (International Water Association) 主催の開発途上国の分散型污水处理をテーマとする会議に参加しました。都市域の尿尿管理が中心テーマでしたが、農村以上の難しさがあります。ミレニアム開発目標などでは、トイレが衛生的かどうかだけで議論されてしまいますが、汚泥の引抜きなどの管理がなされていない腐敗槽を用いた水洗トイレの普及が進むほど、環境負荷は大きくなる傾向があります。この分野での援助を考えると住民や地方政府の意識改革、コミュニティの参加、関連インフラの整備などの必要性は高く、日本がどのように貢献できるか、知恵と経験を共有する必要があると思われました。(酒井 彰)

特定非営利活動法人 日本下水文化研究会

〒162-0067 新宿区富久町6-5 NJS富久ビル別館3F  
TEL & FAX 03-5363-1129 e-mail: jade@jca.apc.org

「ふくりゅう」では、原稿募集をしております。「水」について思うこと、身近な話題、会に対するご意見やご提案、どのようなことでも結構ですから事務局までお送りください。

ホームページもご覧ください

<http://www.jca.apc.org/jade/index.htm>

関西支部 <http://www1.kcn.ne.jp/~k-atsumi/>